

まくわうり（トンネル早熟）

栽培歴

月	3	4	5	6	7	8
作型						
半促成	ハウス		トンネル			
	播種	定植				収穫

栽培の特徴とポイント

まくわうりは、有史以前に中国から渡来しており、古くから重要な野菜であった。柔らかい独特の食感と、ほどよい甘さを持ち、間食にも利用できる。

栽培では、湿害を回避するため、排水性、通気性の良い圃場を選定する。また、ネットメロンと異なり、追熟しないことから、適期収穫を行うことが重要となる。

品種

銀泉：果実は俵型の楕円形で、黄色地に8～10条の銀白色の縞がある。果重は400～500g。

育苗管理

1 床土の準備

床土は、病害虫発生のおそれがなく、通気性・透水性が良く、適度な肥料を含むものを用いる。使用前に、pH、ECを測定し、適正な値であることを確かめる。

2 育苗床の準備

育苗床は、日当たりの良い場所に設置する。定植前には20cm×20cmに鉢間隔を広げることから、本圃1a栽培する場合は、育苗床の面積が3㎡必要となる。

3 播種

1a当たり70粒程度の種子を用意し、地床あるいは箱に播種を行う。播種後は5mm～10mm程度に薄く覆土をし、発芽するまで新聞紙等で覆い、乾燥を防ぐ。

4 鉢上げ

鉢上げは、子葉が開いた直後（播種後7日頃）に、12cmポットに、行う。鉢上げ後、活着するまで、軽くかん水を行い、霧を定期的かけ、空気中の湿度を加湿ぎみに管理を行う。

5 温度管理

		播 種 床		育 苗 床		
		発芽前	発芽後	鉢上げ後 活着まで	活着後本 葉2枚まで	本葉4枚ま で
気温	昼温		25～30	25	22～25	20～25
	夜温		20	23	18～20	15～16
地温	昼温	28～30	23	25	24	22
	夜温	28～30	23	25	20	20

6 水管理

かん水は、午前中の気温が上がった頃に行い、極端な冷水は避ける。かん水量は、育苗養土が過湿、過乾燥状態にならないように、また、夜間に多湿状態とならないように、土壌の湿り具合を確かめ、天候を考慮して変える。本葉が展開してからは、日中に萎れない程度のかん水とし、根を張らせる。定植に近い苗では、吸水量が増えるので、乾燥しないように注意する。

7 追肥

追肥は、育苗後半、肥効が切れる前に、窒素成分で 100ppm 程度（プロ用ハイポネックス 20-20-20 の 2000 倍）の液肥をかん水の代わりに施用する。

8 ずらし

育苗後半、となりの株と葉が重ならないように鉢間を広げる。

本ば管理

1 ほ場の準備

地下水位が低く、排水が良いほ場を選定する。作付け予定の前年に、堆肥等の有機質資材を施用しておく。できれば、定植3週前に、石灰を全面散布し、耕起を行っておく。定植前に、基肥を全面に施用し、耕起後、畝幅 2m で畝立てを行う。畝の中央には、90cm 程度の透明のポリマルチを行う。

2 施肥・追肥

施肥量は、窒素成分で 8kg/10a 程度を基本とし、残存している肥料を考慮して増減させる。追肥は、着果後果実が卵形大になった頃、窒素成分で 3kg/10a 程度施用する。

施肥例 (kg/10a)

肥料の種類	総 量	基 肥	追 肥	成 分 量		
				チッソ	リンサン	カリ
完熟堆肥	2,000	2,000				
苦土石灰	100	100				
ミドリトップ		140		8.4	8.4	9.8
やさい有機10号			30	3	3	3
合計				11.4	11.4	12.8

3 定植

定植は、本葉4枚の頃に行う。

栽植密度は、畝幅 2m × 株間 90cm × 1条とする。

4 温度管理

- 1) 活着期：活着するまでは、トンネルを密閉する。活着後は、徐々に換気を行う。
- 2) 生育前期：30 以上にならないよう、日中は換気を行う。夜間は 15 以下にならないように、トンネルは密閉する。
- 3) 生育後期：トンネルは、日中や夜間の気温が高くなったら、上に上げ、雨除けとして利用する。

5 敷きわら

マルチの上に、敷きワラを行い、つるのやけ防止と固定を行う。

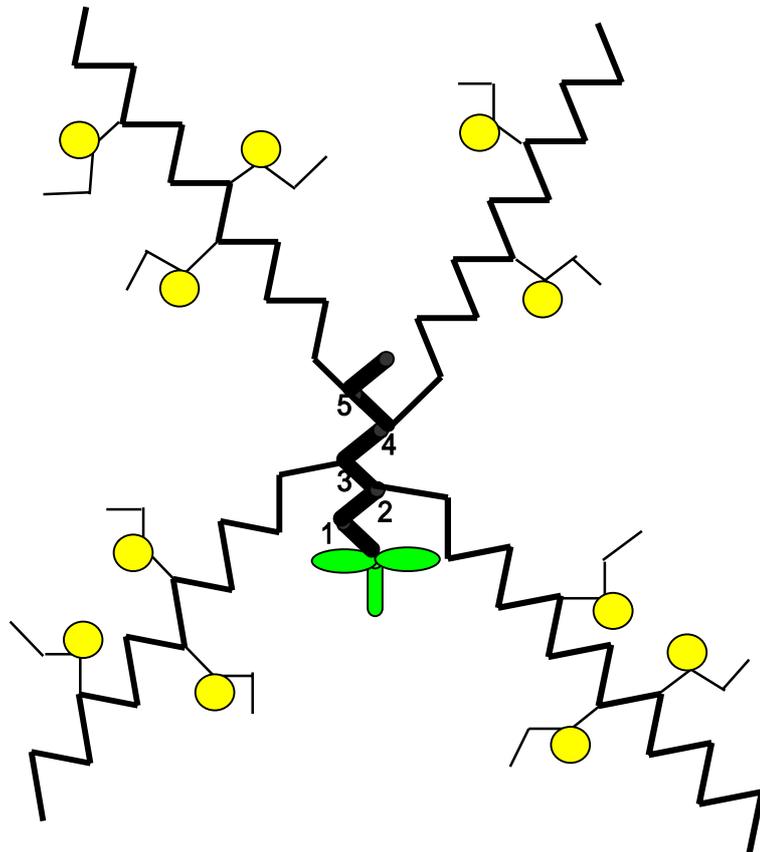
6 整枝

1) 親づるの摘心

本葉が 5~6 枚展開した頃に、摘心を行い、生育の良い子づる 4 本を放射状に広がるように配置する。

2) 子づるの整枝

子づるの 4 節目までの側枝は、早めに摘除する。5 節~10 節までの側枝を伸ばして、2~3 果を着果させる。着果させた側枝は、着果節から 2 葉を残して摘心する。着果後は、側枝は放任し、子づるは、摘心しない。



7 交配

交配は、開花日の朝露がとれた頃から正午にかけて、柱頭を傷つけないように柔らかい毛筆を用いて、両性花を軽くなぜる作業を行う。時々、雄花をなぜると、花粉が多く付き、受粉しやすくなる。なお、開花日は、収穫日の目安となるので記録しておく。

8 摘果

着果後は、傷が無く、形の整った果実を子づる 1 本当たり 2~3 果残して摘果する。その後、着果した果実は摘除する。

9 収穫

開花後、30 日~35 日頃に、2~3 果収穫し、果肉硬度や甘みを確かめてから、順次収穫する。

病虫害防除

つる枯病 : 発病適温は、20~24 で、やや低い温度での多湿条件下で発生が多い。つるがトンネルの外まで伸びた後、梅雨に雨が多いと発生しやすくなる。摘心や側枝摘除後は、発生しやすいので注意が必要。

べと病 : 梅雨期以降に発生しやすい。発生初期までの防除を徹底し、発病が見られたら、被害茎葉は適切に処分する。

うどんこ病 : 高温下で多湿と乾燥が繰り返す条件下で発生しやすくなる。品種に抵抗性が付与されているが、完全ではないので、発生初期までの防除を徹底する。

アブラムシ類 : 5 月頃から発生が見られることから、定植期からの防除を徹底する。

ハダニ類 : 高温、乾燥時に発生が多い。発生初期を見過ごさないよう注意する。

アザミウマ類 : 幼果時に被害を受けることから、開花期からの防除を徹底する。

販売のポイント

収穫後、品質が低下しないように、なるべく早く、販売を行う。収穫時に傷があると、腐敗の原因となるので選別を徹底する。